

第三回近世社寺建築研究集会

建造物研究室

第三回近世社寺建築研究集会は平成元年十一月十六・十七日両日、奈良国立文化財研究所講堂において開催された。今回のテーマは「近世社寺建築の技術的特質」として、近世社寺建築の具体的な建築技法に関して検討を加えることを目的とした。近年、近世社寺建築の修理事業が本格的に進展しつつあり、近世社寺建築がどう設計され、実際に組み立てられているのかといった具体的な技法の解明が可能になってきている。このことは従前の近世社寺建築の修理事業で徐々に知られてきているし、また今後急速に増大するであろう近世社寺建築の修理でより精緻な情報を得ることができるようになるはずではあるが、現時点での知見を総括し問題点を整理しておくことが、今後の調査研究の、また修理現場での実務にとっての指針となるとの認識に立って、このテーマを設定したのである。

第一日目は京都大学名誉教授吉田光邦氏による講演「近世技術の特質」があり、近世の経済成長・開発・教育・情報伝達などの技術の基盤となる基礎的条件の検討から、広汎な知識獲得の手段が確立しており、それが近世の万般の技術の進歩に貢献していたことを明かにされた。次に奈良大学教授岡田英男氏の講演「中世から近世への建築技術の変化と特質」があり、中世から近世に亘る多くの遺構を素材として、軒・小屋組を中心とする技法の時代的特質、中世の建物の近世における修理の実態などを克明に解説された。

第二日目は「近世社寺建築の技法」をテーマに研究会が行われ、まず6人の講師から短い報告があつて、それを素材に討議が行われた。報告は木割書（溝口明則氏）・近世の技術書（田中文男氏）・継手仕口（領家堯之氏）・構造架構（益田兼房氏）・彫刻操形（櫻井敏雄氏）・規矩（服部文雄氏）で、溝口氏は中世と近世の木割体系の差異、木割書の内容と遺構との乖離について論じられ、田中氏は技術書の時期別の特質、内容的特質とその時代的变化を明かにされ、領家氏は専修寺如来堂の修理工事の知見から継手仕口が構造や工事手順と巧妙に関連しつつ決定され、その技法が多様化したことを指摘された。益田氏は近世社寺の建築技法を中国・朝鮮の建築構造と対比しつつその特質を明かにする新しい視点を呈示された。櫻井氏は特に鳥兜形の絵様縁形を取り上げその中世以来の変化や工匠との関わりを論じられ、服部氏は近世の規矩が明治になって理論的解釈を与えられたが、現実には秘伝・口伝が適用されており、遺構に即した調査がなお不可欠であることを強調された。以上の報告、及びこれらをふまえた討論でも、近世社寺建築の技法が従前から知られているとうり、多様な特質を持っているものの、その詳細な実態や、技法とそれ以外の諸側面との関係など、遺構に即して十分明らかになっているとは言い難く、今回の研究集会のテーマ全体が正に今後の研究課題と言つてよい状況にあることが明かとなった。なお今回の集会は建築史研究者・文化財建造物修理技術者・行政担当者等165名の参加という盛況であった。

（山岸常人）